

2026年度

国語

(時間……………50分)
(配点……………100点)

注意事項

- 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
- 「国語」数学のうちから1科目を選択して解答しなさい。
- 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、「10」と表示のある問いに対してウと解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の⑩にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄									
10	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚

- 解答を始める前に、解答用紙の座席番号欄に座席番号を記入し、マークしなさい。また、氏名も書きなさい。解答科目欄には解答する科目をマークしなさい(解答科目欄のマークを間違えた場合、0点となるのでよく確かめてマークすること)。

① 次の設問に答えよ。解答は、解答用紙にマークすること。

(1) 次の傍線の言葉の意味としてもっとも適切なものをそれぞれ選べ。

- ア とまじき
イ 儼かに
ウ 長い間ずっと
エ とてもうるさく

② 彼の発言が多くの人から指摘される。

- ア 非難される
イ 注目される
ウ 支持される
エ 無視される

(2) 「頓挫」の類義語としてもっとも適切なものを選べ。

- ア 誤解
イ 失念
ウ 露呈
エ 中止

(3) 「反目」の対義語としてもっとも適切なものを選べ。

- ア 融和
イ 競合
ウ 不和
エ 支配

(4) 「漸進」と熟語の組み合わせが同じものを一つ選べ。

- ア 授受
イ 減便
ウ 辛勝
エ 許諾

- (5) 次の言葉の意味としてもっとも適切なものをそれぞれ選べ。
- ① 一矢を報いる [6]
ア 他人からの批判をうまくかわす。
イ 成功するために必死に努力する。
ウ 人に助けでもらったお礼をする。
エ 相手に対して少しでもやり返す。
- ② 木を見て森を見ず [7]
ア 自分の興味関心のあることしかしようとしなない。
イ 細かなことにこだわって全体を見失ってしまう。
ウ 周りへの影響を考えないで自分勝手に振る舞う。
エ 目先の利益にとらわれ先のこと考えられない。

心(一) 一転、新しいことに挑戦する。

- ア 気
イ 期
ウ 機
エ 起

② 次の文章を読んで後の設問に答えよ。解答は、解答用紙にマークすること。

味やおいしさは言葉にできないと言われることがある。あの頃あの店で食べたあのラーメンのおいしさは筆舌に尽くしがたい。どんなに言葉を選んでみてもうまく捉えられない。あの店のラーメンもそれに似ているのだが、やはりどこか違う。しかし、何が違うか言葉では説明できない。こういった、たまたまおいしい気持ちになったのではないだろうか。

おいしいは言葉にできないだけでなく、言葉にするべきではないという考えをもっている人もいるかもしれない。何かを食べようと言ったのは「おいしい」「まずい」くらいで、料理についてとくとく語るべきではないというところだ。というのも、味を言葉にすることで何かしる弊害が出てくると思われるからである。

たとえば「言葉にすると自分の体験から大事なものが失われる」と考える人もいるかもしれない。このラーメンには他にはない特別なおいしさがあるのに、それを「濃厚でコクがある」といったように言葉にすると、自分の体験が何か陳腐なものになった気がする。というのも、「濃厚でコクがある」は他の店のラーメンにも当てはまるからだ。この店のラーメンは他とは違う特別なものであるのに、言葉では他との違いが出てこない。その味の特別さが言葉の一般性によって奪われてしまうのである。こうした点から、自分が体験した特別さを大事にしたいなら味は言葉にすべきではないと考える人もいよう。

これは別に、食に対してさまざまな言葉を使うのがいけないと思える人もいよう。x「雨上がりの深い森でたこめる腐葉

- (7) 次の四字熟語とその意味の組み合わせのうち、適切でないものを選べ。 [9]
ア 戦々恐々 ―― 物事を恐れてびくびくする。
イ 自家撞着 ―― つじつまが合わない言動をする。
ウ 一視同仁 ―― 全ての人々を同じように愛する。
エ 是々非々 ―― 人々の先頭に立って模範を示す。

(8) 次の文中における傍線の「が」と同じ意味・用法の「が」を一つ選べ。 [10]

私は古典文学を読むことが好きだ。

- ア どんなに批判しようがかわらない。
イ 成功するには地道な努力が必要である。
ウ そのことですが、私は何も知りません。
エ プレゼントを気に入ってくれたらよいが。

士の香りのワイン。①「自然音」は育てられた野菜本来のたくましい味といった言い回しを聞いて、どういう味がするのかよくわからない。こうした表現は、感じた味を説明することよりも、自分がどれだけ言葉を知っているかを自慢するために用いられている。味を表現するのはなく分語りをしているように思える。気取った表現を使う人は、料理を味わうことより言葉を誇ることには意欲が向いていて、言ってみれば、味そのものに向き合っていない。こうした評論家ぶった表現に嫌気がさすと、余計な言葉をまくるべきではないと思われるだろう。

以上の論点は食に限らない。絵画、音楽、演劇についてあんなにくだ言うことで、鑑賞者が陳腐なものになってしまうように思えることがある。 [y] 鑑賞された作品よりも鑑賞した自分自身に注意が向いてしまっているようなレビューもあるだろう。そういった例を見ると、体験を言葉にすることは弊害があると思えてくる。

(中略)

先ほど、自分の体験した味の特別さは言葉では捉えられないと述べた。この点は味覚に限らず、知覚一般に当てはまる。それを理解するために、眼を使つてなされる色の区別と言葉による色の区別を対比させてみよう。たとえば、トマトもイチゴも紅葉もバラも「赤い」と言われる。しかし、まったく同じ色をしていないわけでもない。トマトやイチゴの赤さには光沢があるが、紅葉やバラの赤さにはさびさび感がある。また、トマトとイチゴの赤さも違っている。イチゴは表面のつぶつぶつ凹凸があるため、トマトのつるつるした表面とは陰影の具合が異なっている。 [A] 赤い色は、赤い色と異なっている。 [A] もちろん、「赤」よりも狭い範囲を指す言葉。たとえば「朱」「茜」「真

紅「チェリーレッド」「スカレット」といったものもある。だが、それら意味するものにも一定の範囲がある。「朱色」と言われる二枚の紅葉を見比べても、それぞれの色合いが微妙に異なっているのだ。

以上からわかるのは、言葉による区別は出知覚による区別よりも粗いということである。二つの色、二つの音、二つの形、二つの味は、見たり聞いたり触ったり味わったりすれば区別できるのだが、その違いに対応するような言葉が見つからないことがあふ。そのため、ある料理を食べたときに感じた味だけに当てはまり、よく似ているが違った味を「シヨ」が「シヨ」という言葉で見つからない場面も出てくる。そうした場面に「シヨ」という言葉で表現することはできないと思えるのだ。

とはいえ、この問題は解決できないものではない。確かに、私たちが普段使っている言葉のなかには、幅がない特定のものを指す言葉はないかもしれない。②「そういふ言葉新しく作ることは可能である。専門用語などはまさにそうした理由から作られているのだ。たとえば色を定義するためのカラーコードでは、「#0000FF」など、十六進法によって日常的な色用語よりもずっと細かい区別が使われている。「#0000FF」と「#0000F」の違いは、視力が悪ければ見分けられないくらい細かいものだ。

やろうと思えば味にもそうした言葉を作り出すことができはずだ。「砂糖○グラム、塩○グラム、味噌○グラム、酢○ミリリットル……」で作った味に特別な名前をつけたいのである。砂糖や塩の量を指すと、より細かい区別がつけられる。ひよこすると、同じ味の商品を大量生産している食品メーカーには、そうした特別な言葉がすでにあるかもしれない。ともかく重要なのは、たとえ日常的な言葉づかいで違いが表現できなくとも、味に味にもそうした言葉を作り出すことができはずだ。

材料となるだろう。それを参考にすることで、ラーメンが食べたときに「あの店に行ってみよう」と思えるし、ラーメンは食べたけれど味噌ラーメンの気分ではないときには「あの店ではない」と判断できるようになるのだ。

さらに、もしラーメン店について伝えてきた人が味に関して信頼できる人だったら、「おいしかった」「他では味わえない濃厚さ」あるいは「おいしくなかった」「どこにもあるような味だ」といった評価も参考にすることができ、その情報に基づいて、おいしくラーメンを食べたいならそこに行こう（または、あの店おいしくないから避しよう）と判断できるのだ。

以上のように、言語化された他人の体験について知ることで、自分では体験していない物事についての情報を得られ、その情報に基づいて自分の行動を決定することができる。私たちが言葉を使う目的の一つは、このようにして情報を共有し、行動のための材料を増やすことである。こうした目的は「赤」など幅のある言葉でも果たすことができ、たとえば、「新しく発表されたパソコンの色は赤だった」と聞いたとき、それを聞いただけでは、どういった色合いの赤なのかはわからない。

「赤」同様、「あの店のラーメンのスープはさっぱりしている」と聞いたとき、具体的にどんな「さっぱり」なのかはわからない。その「さっぱり」は、具体的にどんな「さっぱり」なのかはわからない。気をつけなければならないのは、言葉の目的は体験の代わりとなることではない、という点である。たとえば、「濃厚で、コクがあって、口に入るとすぐコンショウのにおいが鼻を抜ける。後味の風味はコクがく消え……」というように言葉を重ね、特定の料理の味をしっかりと表現することができ

きなくとも、その違いを表す言葉を新しく作れば良いということだ。解決法はこれだけではない。これは別に、既存の言葉もたくさん重ねるという方法もとれる。「濃厚な」が当てはまる料理は数きれないほどあるとしても、「濃厚でコクがある」というように「コクがある」を追加することで、当てはまる料理の幅が狭まる。一口に入れてすぐコンショウのにおいが鼻を抜ける味は五感すべてで得た情報から「トウ」されたものであるため、他の感覚の言葉も使えはならず、たとえば「香ばしい」「あつあつ」「コリコリとした」「色鮮やかな」といったものである。こうした作業を繰り返していくと、特定の料理にしか当てはまらない表現が作れるだろう。

こうした多様な言葉を使う試みは、自分が感じたものを他人に伝える職業ではじつぱんに行われている。調理師、料理研究者、フードコーディネーター、ソムリエ、調香師、画家、デザイナー、作曲家、演出家など。こういった人々の仕事では、言葉が果たす役割が非常に重要になってくる。次に、言葉が果たす役割がどういふものかを説明しよう。さらにそこから、言葉がなければ経験もしくなるということも明らかにしたい。

私たちが言葉を使う目的の一つは情報伝達である。体験を言葉にして伝えることで、それを体験していない人にも「その体験がどのようであるか」が伝わるのだ。たとえば、他人から「あそこ新しくできたラーメン屋は味噌ラーメン専門店だ」と聞けば、実際に行かなくても、その店に行けば味噌ラーメンが食べられる、豚骨ラーメンや醤油ラーメンは食べられない、と知ることができる。こうした情報は自分が何を食べるかを判断するための

たとして、その表現を耳にしたからといって、実際に味が感じられるわけではない。だが、言葉が体験の代わりにならないことは、言葉の欠点ではない。というのも言葉の役割は、その味を体験した店に行くかどうかを決めるうえで判断材料を与えることだからだ。そして、その役割は先ほどの長い表現で十分果たせるだろう。体験の代わりを言葉で伝えるのは、言葉の目的を理解していない筋道のない願望なのである。

言語化によって得られる利益は、他人から判断材料をもらえるだけではない。これとは別に、言語化した本人にとっても利益となるものがある。それは、自分の体験を明確にする助けとなることだ。例として、いま食べているカレーと先週食べたカレーの違いを比べる場合を考えてみよう。しかも、言葉を使わずに比較してみよう。いま食べているカレーはまさに味がしているが、先週食べたカレーの味はいまはしなない。先週のカレーはどっかどうだったのだろうか。それを思い出そうとすると、再び口のなかに味が広がって行くわけではない。何かはんやりとしたイメージは浮かんでくるかもしれないが、非常に頼りないと思われる。いまのカレーと何か違うとはわかった。どう違うのかまではうまく理解できないだろう。さらに、先週食べたカレーと先週食べた別の店で食べたカレーの違いを比べると、違いは「i」になっただけだ。

だが、言葉を使えば区別をつけるのは簡単だ。「いま食べているカレーは、ルーはサラサラして、しびれるような辛さ、ヨーグルトの酸味、玉ねぎの甘味が感じられる」「先週のカレーは、ルーはドロドロで、トマトの酸味が感じられ、最初はそこまで辛くないのだが後を引く辛さがあった」といったように、言葉にすれば違いが明確になる。さまざまな言葉が使えるようになることで、その分だけ多くの区別がつけられるようになるのだ。

感じた味や香りを言葉にする作業は、ソムリエを目指す人が読む本でもよく推奨されている。ソムリエはさまざまなワインの味や香りを記憶して区別する必要があり、その能力を養うためには、ワインを飲んだときに感じた香りや味をメモするのが良いそうだ。言葉にすることでさまざまなワインの違いを整理でき、また、メモを見返すことで「あのワインとこのワインが似ている」と感じたのはこういう共通点があったからなのかといったことも発見できる。自分が感じた味の共通点や「i」を、より明確な「んき」から理解できるようにするのだ。

以上のように、体験を言語化することで体験が明確になる。現在体験している味と過去に体験したさまざまな味の違いは、言葉による区別を利用することで明らかになるのだ。逆に、体験を言語化しないと、その体験が他の体験とどう違うのかもよく理解できない。言語化は体験の特別さを奪うものではなく、特定の体験の特別さを際立たせてくれるのだと言えよう。

（源河亨「美味い」とは何か」による）

- (1) 二重傍線部①～⑤のカタカナの部分を選択に直したとき、その漢字と同じ漢字を用いるものをそれぞれ一つずつ選べ。
① サイはい 11
ア 趣味でばんサイを育てる。
イ シンボジウムをかいサイする。
ウ サイげつ人を待たす。
エ ハサミで布をサイだんする。

- ② シヨがい 12
ア 長編小説「シヨ」を読む。
イ 言葉の乱れをシヨしようとする。
ウ 畑に「シヨ」を散布する。
エ 彼は常識がけつ「シヨ」している。

- ③ トウこう 13
ア 世紀の難問とかく「トウ」する。
イ トウけいデータを参照する。
ウ 段差に足を取られて「トウ」する。
エ かんせい「トウ」から指示を出す。

- ④ ビンばら 14
ア 施設の使用「ビン」を調べる。
イ らい「ビン」の挨拶を聞く。
ウ ビン「ん」問題に取り組む。
エ 休日にかい「ビン」公園で過ごす。

- ⑤ こんきり 15
ア 提案の受け入れを「こん」する。
イ バスでちよう「こん」を移動する。
ウ く「こん」な人生を送る。
エ チームのほん「こん」地を移動する。

指定校制推薦入学制度 総合型選抜入試

公募制推薦入試【前期】 【併願制・専願制】

公募制推薦入試【後期】 【専願制】

国語

一般入試【第1期】

一般入試【第2期】

(2) 傍線部dについて、筆者がこのような考えをもっている人はいるかもしれないと言っているのはなぜか、その理由としてもっとも適切なものを選べ。16

ア 芸術体験などは違って料理に関する体験というものは言葉では表現できないものであって、そうしたものを無理やり言語化する、自分の特別な体験が陳腐化してしまうだけなく、他者に不快感を与えることにもなるから。

イ 味に関する自分の体験を「おいしい」や「まずい」などといった単純な言葉や自分の知識を自慢するような言葉で表現すると、自分の体験が自分だけの特別なものではなく、誰にでも体験できる陳腐なものになってしまうから。

ウ 世の中には、「料理は「食べる」ものであって「語る」ものではないなどと考えている人が少なくないため、料理の味を言葉で表現すると、そうした人たちの間でさまざまな対立が生じる恐れがあるから。

エ 味を言語化すると、言葉の一般性によって自分の特別な体験がありふれたつまらないものになってしまう、味そのものに向き合わず評論家のような気取った言葉を使ってしまったりする可能性があるから。

(3) 本文中の「x」「y」「z」に入る語句の組み合わせとして、もっとも適切なものを選べ。17

ア たえば また だが
イ むろん だから だが
ウ たえば だから つまり
エ むろん また つまり

(4) 本文中の「A」に入れるのにもっとも適切なものを選べ。18

ア こうした例だけでは、「赤」という言葉にどれほどの幅があるのかわからない。

イ こうした例だけでも、「赤」という言葉の幅は他の色と比べて広いことがわかる。

ウ こうした例からわかるように、「赤」という言葉の適用範囲には一定の幅がある。

エ こうした例からわかるように「赤」という言葉で表されるものは自然界に多い。

(5) 傍線部dについて、「言葉による区別の粗さ」が引き起こす問題を解決するにはどうしたらよいか、その説明としてもっとも適切なものを選べ。19

ア 料理の味のような知覚に関するものの違いをうまく表現できないのは言葉そのものではなく、その使い方に問題があるのであって、味などを表現するときには、日常生活で使う既存の言葉ではなく、新しい言葉や専門的な言葉を使うようにすれば違いをはっきりと表現できるようになる。

イ 味の違いを言葉で区別することが難しいのは味を表す既存の言葉が少なからずあり、色を表す言葉のよつに新しい言葉をたくさん作り、それらを重ねて使うことによって、色と同じようにさまざまな味を細かく区別し表現することができるようになる。

ウ 私たちが普段使っている言葉は幅が狭いものが多いため、味の違いを細かく区別することができないが、味を表現するときにはできるだけ幅の広い言葉を使ったり、色を表す言葉のように味を表す新しい言葉を作ったりすれば、味の細かい違いまで表現することができるようになる。

エ 料理の味の違いを区別して表現したいときには、日常の言葉を使うだけでなく、専門用語のように幅が狭い言葉を新しく作ったり、味覚以外の感覚の言葉なども含め、さまざまな既存の言葉を重ねて使うことによって、その違いをうまく表現することができるようになる。

(6) 傍線部cについて、この言葉の特徴についての説明としてもっとも適切なものを選べ。20

ア この言葉は新しくできたラーメン屋に行った人物が自分の体験を言葉でいくつも重ねて表現したもので、この言葉を用いた他者は、その店に関する情報をその人物と共有し、実際に店に行かなくてもその人物とはほぼ同じ体験をすることができるようになる。

イ この言葉は新しくできたラーメン屋に行った人物が自分の体験を既存のわかりやすい言葉で表現したもので、この言葉を用いた人物はその言葉を新しい情報として獲得することになり、その情報を自分自身の体験として他者に伝えることができるようになる。

ウ この言葉は新しくできたラーメン屋に行った人物が自分の体験を言語化したもので、この言葉を用いた他者はその人物と同じ体験をすることはできないものの、その店に関する情報をその人物と共有するだけでなく、その情報に基づいて自分で判断し行動することができるようになる。

エ この言葉は新しくできたラーメン屋に行った人物がその店が「どのようであるか」を伝えたもので、その情報を得た人物は、自分が既に持っている情報や体験と比較してそれが信頼できるものかどうかを判断したうえで、その後の自分の行動を決定することができるようになる。

(8) 傍線部dについて、自分の体験を明確にするとはどういうことか、その説明としてもっとも適切なものを選べ。22

ア 食べものの味は、いま食べているものであれば言葉を使わなくても、正確に理解することができるが、過去に食べたものについては、言葉がないと大まかな味すら思い出すことができない。

イ 味覚の体験というのは人間の五感のなかでも特に記憶に残りにくい。そのため、現在と過去の体験を比較し区別することは難しいが、言葉を使えばその違いを細かく整理して記憶し、その記憶をもとにして区別することができるようになる。

ウ 食べものの味は、現在の体験と過去の体験を言語化すれば両者を比較し区別することはできるが、ソマリエのように体験を言語化するのはなく、メモに取って記憶しておくようにすれば、それらをより明確に区別することができる。

エ 現在の体験と過去の体験を、言葉を使わずに比較することは難しいが、言葉で表現すれば違いが明確になり、さらにいろいろな言葉を使えるようになると、それらによって多くの区別がつけられるようになる。

(7) 本文中の「B」に入れるのにもっとも適切なものを選べ。21

ア だがそれでも「緑だったら買おうと思っていたけど、赤ならやめとくか」と判断できる。

イ もろろん、「パソコンは性能が重要で、色なんて何だってかまわない」という人もいるだろう。

ウ そのため、「なぜもっと詳しく話してくれないんだ」といって不満を感じるようになってしまう。

エ だから、「B」だけではなくわからないから、実際に自分で見て決めよう」といったことになる。

(9) 本文中の「i」「ii」に入る語句の組み合わせとして、もっとも適切なものを選べ。23

ア 顕著 基準点
イ 曖昧 相違点
ウ 顕著 相違点
エ 曖昧 基準点

(10) 傍線部の意味として、もっとも適切なものを選べ。24

ア 詳しく紹介されている
イ 大きく取り上げられている
ウ 強くすすめられている
エ その良さが認められている

(11) 本文の内容に合致するものを一つ選べ。〔25〕

- ア 世の中には味覚を言語化することに反対し、さまざまな弊害を指摘する人々がいるが、そうした弊害はどれも比較的簡単に解決できるものであるうえ、人間は味覚を言語化しなれば食べものの味を正確に理解することができないことから、体験の言語化は人間にとって必要不可欠で、それに反対するのは的外れだと言わざるを得ない。
- イ 一般に言われているように、食べものの味を言葉にすることに弊害があるのは確かであるが、そうした弊害は言語化の仕方が不適切であることによるものであるため、味覚の体験を適切な方法で言語化するようにすれば、言語化による弊害を避けることができるだけでなく、さまざまな利益を得ることもつながっていく。
- ウ 人間の五感というものはその人物だけの特別な体験であるため、それを言葉にして他人に伝えることは難しいが、知覚の言語化は、体験を明確にしたり行動を決定する判断材料となったりするなどさまざまな利益をもたらすため、私たちはソムリエのように小さな違いも見逃さない鋭い感覚を鍛えて、言語化の努力をするべきである。
- エ 食べものの味を言葉にすることに否定的な考えをする人がいるが、そのうち「味覚を言語化するとその体験の特別さを奪う」といった指摘については、体験を言語化することは体験を明確なものとし、言葉を通じて受け取った他人だけでなく言語化した本人にも利益をもたらすものであって、そ

うした指摘が当たっているとは言いがたい。

※国語（12月13日実施）の問題は、41ページから始まります。

指定校制推薦入学制度
総合型選抜入試

公募制推薦入試〔前期〕
〔併願制〕・〔専願制〕

公募制推薦入試〔後期〕
〔専願制〕

国語

一般入試〔第1期〕

一般入試〔第2期〕